

平成 16 年度第 5 回府中市次世代育成支援行動計画協議会議事録

時間 平成 16 年度 5 月 26 日 15:00～17:00

場所 ルミエール府中第 3 会議室

出席委員 浅田委員 小川委員 小熊委員 北場委員 澤野委員 杉村委員 庭山委員
平田委員 弓削田委員 山村委員 田口委員

欠席委員 北川委員 北村委員 木下委員

(事務局) 吉永子育て支援本部長 吉野子育て支援課長 加藤保育課長
田添待機児解消推進担当主幹 戸井田保育課主幹 山崎健康推進課長
松本子育て支援課推進係長 小泉保育課管理係主事 石堂子育て支援課主事

次第

1. 開会
2. 傍聴人の入場について
3. 資料の確認

議題

1. テーマ別の検討 1 地域子育て支援
2. テーマ別の検討 2 育児不安・虐待
3. テーマ別の検討 3 ひとり親
4. その他
 - 1 第 4 回協議会議事録の記載内容の確認について
 - 2 第 6 回協議会の開催日及び会場の確認について

1. 開会
2. 傍聴人の入場について

子育て支援課長

定刻を 5 分ほど過ぎましたので、まだ見えていない方もいるようですが、第 5 回の検討協議会を始めさせていただきます。本日は木下委員、北村委員、北川委員の 3 名の方から欠席の届が出ております。

それから傍聴につきまして 6～7 名の方がお見えになっておりますので入っていただいてもよろしいでしょうか。

委員会一同 了承

3. 資料の確認

子育て支援課長

きょう、北場会長はのどの具合が悪いということで、今日の進行は副会長の平田委員にさせていただきますのでよろしく願いいたします。

それでは最初に資料の確認をさせていただきます。

まず、事前配布資料として3点ございまして、資料5 - 1「統計資料(地域子育て支援等)」ということで、きょうのテーマに関連したところで数字的に押さえた資料を若干ご用意しております。2番目が資料5 - 2としまして「総合的な母子家庭等自立支援策の展開について(厚生労働省)」という資料でございます。これはきょうのテーマであるひとり親の部分の関連で用意したものでございます。この資料内容としましては、14年度の時点で書かれておりますが、内容的には現在公布されているものを踏まえたものでございます。平成14年11月に、若干説明をしますが、資料の最初の上段にありますように「母子及び寡婦福祉法等の一部を改正する法律」が公布されました。そこで母子家庭の就労支援を重点的に進めていくということで、3ページの「エ 国及び地方公共団体における総合的な自立支援体制の整備」という項目の3行目ですが母子家庭及び寡婦自立促進云々とございまして、法的な義務的計画ではございませんけれども、都道府県、それから市においては自立促進計画をつくるようにという指針が出ておりますので参考としてお出ししております。資料5 - 3「テーマ別の検討」ということで、本日の議題にかかわってきますテーマ3つにつきまして市民の意向調査で得られた結果と、自由回答を含めた結果を整理し、次に現状方向性につきまして現在の福祉計画等の中でとらえた範囲について記述をしているものでございます。それから資料5 - 4としまして、今日お配りしておりますが、意向調査の自由回答集ということで小学生編を用意しています。それから資料4 - 8(改訂版)としまして、既にお出ししました就学前児童編につきまして、会議の中でご意見があり、もう少し項目を整理しようということで項目の整理をし、あわせて施設名等が特定される部分がありましたので、それを直したものでございます。

参考資料としまして、この会議のスケジュール表。日程を変えたのではなくて、会場等が決まっていなかったものを、決まったものに入れ直したものでございます。それから前回、第4回の検討協議会の議事要旨でございます。

それから、あと2点追加がございまして、今日の議論の参考ということで、前回にお出ししていますクロス集計問10、子育てについて悩んでいること、気になること、に関する資料があります。今日の議論の関係で子育て広場等につきましてA3版の図面を1枚用意しております。資料については以上でございます。

では、副会長お願いいたします。

副会長

それでは、ご案内がありましたように、北場会長はのどを痛めていらっしゃいますので、平田が議長をとということですので。実は最初、会長にぜひお休みをなさらないようにというように申し上げましたので、まさかこんな事態になりますとは思ってもよかったですけれども、微力ながら尽力いたしますのでよろしくお願いいたします。

今日の会議ですけれども、議題が1、2、3とございまして、テーマ別の検討1、地域子育て支援というのがございます。あと育児不安、虐待、ひとり親、これは地域子育て支援にもかかわる部分もございまして、地域子育て支援の中に多少そういう問題が入ってくるかと思えます。ですから、3つありますけれども同じ配分ではなく、地域子育て支援をメインというような形で進めたいと思えます。

それから今、資料の説明がありまして、前回私はたまたま欠席をしましたときに、私の幼稚園はすごい人数が受けているんだという話がありましたので。皆さん、資料をどうぞごらんになりながら結構ですから、私はちょっと弁解をさせていただきます。

私どもの幼稚園は420名の定員を持っているところ、こしは449名の子どもを受け付けました。正規の教室で30名程度のクラスできちんと運営をしております。余分に教室をつくっていたので余分に取れまし

た。きちんと東京都にも報告をして、ことしは地域の人を多く受け入れないわけにはいかないの、何とか受け入れますということで報告をした上でやっております。あそこで年少180名というのは間違いでありまして、実は年少154名をお受けいたしました。そういうことで、地域の幼稚園には地域の幼稚園の悩みがございますけれども、一応弁解をさせていただきました。

それから、地域の子育て支援に移ります。地域の子育て支援のメインになるものは資料5 - 3であります。本来でありましたら、ここで事務局から資料説明というような形をとるわけですがけれども、この資料説明をするだけでも結構時間がかかります。ということで、もう事前にお目通しをいただいたという前提で議論に入りたいと思います。突然議論に入るといって、いかがですかというのも何ですから、私のほうから少しお話をさせていただいてから議論に入りたいと思います。

今の子どもを取り巻く2つの問題という話があります。今の子どもというのは、1980年代ぐらいからの子どものお話であります。それに関する2つの課題、問題というのは何かというと、1つは体力が落ちてきたことであります。これは文部科学省の調査にも如実にあらわれてきております。1983年に任天堂がファミコンを出したことによって、ひとり遊びに拍車がかかった。なおさら耐力が低下した。それが1つの問題。

それからもう1つ。これは地域子育て支援にかかわる問題だと思っておりますけれども、地域での子どもの集団がなくなったという指摘があります。私も昭和20年代の生まれの人間は、それこそ学校から帰ってきて、もしくは幼稚園から帰ってきて、お家に「ただいま」と言いますと、もうそれっきり親の干渉は受けなかった。つまり地域にはお兄ちゃん、お姉ちゃん、妹、弟みたいな人たちがいて、集団になって遊べた。そして地域の目もあって、何か悪いことをしているとおじちゃん、おばちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんが注意してくれたり、助けてくれたりしてくれた。そういうような地域の目があった。ですけれども、このごろは核家族化の進展、地域交流の希薄化というようなことで、地域での子どもの集団が消えてきました。これは1つの原因としては、親同士の交流が減ってしまった、だから地域の子どもも集わなくなったということがあろうかと思っております。

原因はさておき、地域の集団が消えたということになると、遊ぶ場まで親が干渉しなければなりません。そうすると公園へ行って、砂場では順番を守って、こうやって遊ぶんですよとか、ブランコというのは、こういう乗り方をしてはいけないんですよと、つまり、遊び全般まで親が見なければならなくなってしまった、ということが親御さんのストレスを増大する1つの原因になっておりますよという指摘が、もう各方面でされております。

この地域子育て支援についていろいろなストレスを抱えているというようなお話はここに出てまいりますけれども、大きく分析をしていくと、1980年代からの今の子どもを取り巻く2つの問題というのがすごくかかわってくるなということで、冒頭にお話をいたしました。

ということで、以前の私どもを育てた親よりも子どもは少ないかもしれませんが、子どもに接したり、子どもを指導したりする時間は大いにふえて、なおかつ、それを解消する、もしくは指導を仰ぐような人間関係が薄れてきた今のお母さん、もしくはお父さん方が抱える問題、それを地域なり、行政なりがどういふふうに関与、もしくは援助、またはコーディネートしていけるかというようなことが、この地域子育て支援、このテーマ別の検討1の問題点といえますが、核心だと思っております。そういう意味でこの資料5 - 3をごらんになりまして、これ以降ご発言をいただければと思います、先にお話をいたしました。

まずはいろいろなところにポップコーンとか何とか出てきますけれども、そういう意味でもそれぞれご発言をいただければと思います。よろしく願いいたします。

少し資料5 - 3をお読みいただいて結構でございますので、どうぞお読みください。

委員

1番の同居親族からの支援が期待しにくいという、これはちょっと気になる点です。同居していると子どもを預けたり、お母さんが病気をしたときにも預けられるような気がするんですけども、こういうふうに活字になるとどういう意味かなと、わからないんですが。

副会長

これはご説明が必要だと思いますので、先ほど吉野課長から説明を聞きましたので、吉野課長に振ります。お願いします。

子育て支援課長

多分ご指摘のとおり、これは不適切な表現だという気がします。同居親族からの支援が期待しにくいというのは、要は前段の核家族が多いということで、内容としての同居親族からということではなくて、形態として比率からいって同居親族からの支援は期待しにくいということです。少し言い方が悪いかもしれませんが。

副会長

いかがですか。

委員

資料は読んでまいりましたが、今一番最初に平田先生が1980年代からの子どもを取り巻く2つの課題として、核家族化と地域社会の減少をあげられました。「原因が何かはさておき」と言葉をつなげられたのですが、私はその原因を突きとめないと、根本的な解決につながらないと思ひまして、私の中で原因は何だろうと。反すうしているところなので、すぐに意見が言えない状態なんですけれども、原因を知ってこそ、解決策が何か見出せるのではないかと。すみません、もう少しお時間をいただければと思います。

副会長

実は私の計画としては、原因のあたりを2番手ぐらいに議論するといいかと。今、振りまいたのは、地域で子育てを支援するポップコーンのような場がありますよね。そういう場を利用したいけれどもわからないとか、入りにくいとか、いろいろなことがあるので、受け皿といいましょうか、場といいましょうか、そういうものがわかりやすいのかとか、入りやすいのかとか、利用しやすいのかとか、そんなことがうかがえればと思ひましたけれども、そのほうはよろしいですか。

委員

ポップコーンがいつ開催されているかなどといった情報は、府中市の広報紙に必ず毎回載りますので意識していらっやって、かつ広報紙を手元にお持ちの方に関しては、情報はまず漏れることはなく、行き渡っていると思ひます。ただそこに、読んでいる方の目とまるかどうかです。意識していないと、今は非常に情報が多い世の中ですので、読み流してしまうことがあると思ひます。ですから、多分府中市としては流すべきものは流していらっやるけれども、それをきちんと市民がキャッチできているかということに関しては多少疑問もあります。

実際にそれを目になさって、自分も参加してみようと思われた方がいらしたときに、やはり今の現状、乳

幼児を連れての方が足を運ぶには、まだ6カ所では足りないかと思います。でも、これは徐々に何カ所かでもっとふえていくというように聞いておりますので、それで解消されるのかなと。

あと、その場まで足を運ばれて、それがその方にとって期待どおりのものであるか、ということに関しては非常に難しいと思います。というのは、何を期待して、その場に足を運ばれるのかは、それぞれニーズが違うと思うからです。子どもの遊び場として遊びをいっぱい提供してくれる、そういう場を期待していらっしゃるのか、それとも親同士話をしながら、子どもは伸び伸び遊ぶ、そういう自由スペースというような形で期待していらっしゃるのか、もしくは悩みを抱えていらして、専門的な相談を受けられることを期待していらっしゃるのか、おのおのだと思います。ニーズがおのおのですので、どこかに絞ってしまうのも危険だと思います。でも、多少は絞らないと漠然とした集まりになってしまいますし、その辺が今手さぐり状態かというふうに思っております。

副会長

今、お話ししておりますのは2ページ、3ページあたりの部分だと思います。親子で集える場についてという意味では、利用状況は、文化センターを除いて、認知も利用状況も割合と低いんだということとか、なかなか遠くて行けないとか、条件がどうした、こうしたというようなお話があります。私の今日の進め方としては、場の問題をとらえた上で、その後には時代背景とか、動機とか、気持ちとか、ソフトの部分を詰めていこうかという気がしているんですけども、そのとおりになりますかどうか。皆さんもお考えだと思いますけれども、この辺で場が足りているか、集える場が足りているか、情報の提供としてどうなのかなんていうことでもご意見がありましたらお願いできればと思います。

委員

実際に高齢者で言えば支援センター的な機能が、府中市では保育園とか、幼稚園というのは相談業務というように、ここしばらくどんどんそちらの方向に来ていると、私自身はいろいろなものを読んだりして思っています。今府中市の中ではそういうふうにとらえているんですが、そういう観点でお話してよろしいでしょうか。

副会長

どうぞ、どうぞ。

委員

それは、そのとおりでよろしいですか。

副会長

もう、自由なお考えで結構です。

委員

実際なんですけど、そういうふうに保育所等が地域の相談窓口的な機能も行っているということはよろしい。今そういうことをやっていらっしゃる私は思っているんですけども。

副会長

あれは義務づけているんでしょうね。

委員

確かそうですね。

副会長

義務づけているからやっているとは言っているけれども、機能を果たしているかどうかはどうなんですか。

委員

高齢者で言えば在宅支援センター的なものが、子育て中の母親、子どもたちにとってはそういう相談的なところが保育所だというように認識して、今義務づけられているということが確認できたんですけれど。その辺でかなりそういう意味では地域に根ざしているだろうと思われる保育所、幼稚園なりがかなりな広場もあるということが、園庭も広場ということをとらえると、情報が広く行き渡っているのではないかと、私なんかは感じますが、その辺の状況を伺いたいと思います。

副会長

では事務局のほうで、今義務づけられているなんていい加減なことを言いましたけれども、幼稚園のほうは義務づけられてはおりません。任意です。保育園はいかがでしょうか。育児相談等で。

子育て支援課長

保育園、幼稚園と資源的には市内、幼稚園でいくと20カ所、保育園は認可で30カ所あります。おっしゃるとおりいろいろな相談とか、いろいろな部分では、数的には十分な数と配置があるのではないかと思います。義務づけ云々はちょっとわかりませんが、考え方としては保育所がそういう機能を持っているという認識で事業を進めています。例えば、公立保育所であれば園庭開放事業。新しいものではポップコーンパパというのもそれに当たると思います。それから、いつでも相談を受けるという体制ができています。ただ、それが機能しているかという、例えば具体的に浮かぶ保育所を見ますと、いつでも相談に来れますよと言いつつも、その相談スペースがどうかという、なかなか十分ではないものがあるんです。そういう中で、それをもう少し明確に位置づけて、子育てひろば事業として、私立保育園4カ所で、これは場所を整備して、それから事業を組みながら地域の相談機能と広場機能をあわせた事業展開をしています。それから幼稚園さんについてもいろいろなアンケートを見ますと、それぞれの取り組みの中でそういう相談機能を果たしていっています。

今回議論をしていて、これからどうするかという部分では、当然今申しました相談機能、地域の施設相談機能についてどうやったら充実していけるかとか、どうしていくべきかというのは、今回この計画の協議の場を踏まえて、改めて展開といえますが、組み直していければと思っています。そういう意味では、ご意見をいただければと思っています。

委員

その中身の意見なんですが、やはり医療センターで出産前から話があたり、父親の沐浴指導なんかもある中で、それが終わってから保育園へ行くなり、幼稚園へ行くなり、その辺はあると思うんですけれど

も、すべて管轄が違うためにぶつ切りに終わってきていないでしょうか。就学時検診等でも、また児童は振り分けられるというような現状もあります。そういった一貫して、やはり地域地域で見たいかのような機能は今までなかった。また、そういうところが細かい部分でも支援になっていくのではないかというふうに思っています。そのところをさらに充実できたらと思いますが。

副会長

わかりました。いかがでしょうか。

委員

地域の拠点整備ですよね。その辺の充実をという、お話があったんですが、一方、社会福祉協議会の役割としまして3つぐらいあると思うんです。1つは地域の場づくりですが、これは行政の拠点云々ではなくて、要は住民間で身近なところに場所づくりをしていく、あとはそこにかかわる人材の育成があると思うんです。それと、そういう場所がありますというような情報の提供であったり、そういったものをリンクさせながら子育ての場づくりを行っている、そういう取り組みがこれからすごく大切なのかなと思っているんですが、いつもいつもこういう話をしますと、難しいでしょうということでも頓挫してしまうんです。大変時間のかかることなんですけれども、やはりそういったことが必要であると思っていて、副会長さんがお話になったように、我々が小さいときは、地域の身近なところに場があったり、人材がいて、本当に自分の親のように怒ってくれたり、そういった方がたくさんおられたり。あるいはまた、先輩からいろいろな情報をいただいたりですとか、そういうものが本当に身近にある中で生活をしてきたというところがあります。そこに行くのがいいかわかりませんが、ただ、そういったことはすごくプラスになっているという実感もあります。そんなようなことをこれから取り組むことによって、実現できればと思っておりますけれども。

副会長

場としては適当な数はあるんでしょうか。機能しているかどうかは別問題にして、場としては適当な数はあるんでしょうか。ここに見ていきますと、例えば3ページの参加したいが子育てひろば等については近くにないので参加できないとか、ポップコーンなんかに関しては、とてもためになる尊い事業だと思っておりますけれども、なかなか情報が入ってこないとか、参加しにくいようなアンケートが出ていると、もう少し情報を提供するにはどうしたらいいんだろうとか、回数や場所をもう少しふやしたほうが、このアンケートを見る限りでは、いいのかというような感じにも見えるんですけれども、その辺もいかがでしょうかね。

委員

一番最初にポップコーンが始まったときは、年齢ごとに分けるつもりはなく、0、1、2、3歳、つまり未就園児であれば毎週参加可能な形でやりましょうということで出発したのですが、初日蓋を開けてみましたところ、200人を超える親子が1カ所に集まりました。もう会場からあふれてしまっていて、その受け付けをするだけで10時から12時という2時間がほとんど終わってしまうような、すごい反響だったと聞いております。実際2回目、3回目も結構な数が集まりまして、急遽0歳、1歳、あと2～3歳というふうに年齢ごとに開催日を分けて対応いたしました。現在、それで2年半ぐらいやっているわけです。少なくとも私の参加しています総合体育館では0歳児は若干少ないんですが1歳、2～3歳児になりますと60組や70組の親子の方がいらっしゃいます。当初は0から3歳全員が毎週参加できるものとしていたところが、実際物理的な制約で、どうしても月に約1回か、もしくはよくて2回しか対象年齢の会がないというふうになってしまったのが

現状です。

本当は、特に行き場がない、お友だちが欲しいと思っている0歳をかかえた方の育児不安などを解消するために、せめて0歳の方には毎週そういう場があればと思うのですが、現実として、それは今は難しい状態になっています。

今3カ所で展開している学童のほうは地域密着型で、人数ももっとこじんまりしております関係上、0から3歳まで分けておりません。0から3歳まで全員受け入れるという形で毎週1回行っております。

とはいっても、総合体育館と女性センターと新町文化センターという当初の3カ所においても、年齢区分を厳密に行っているわけではなく、参加したければほかの年齢のときもどうぞというふうにお声をおかけします。しかし、基本的には月に1回、もしくは2回しか参加できないという現状です。私は、特に0歳のお子さんをお持ちのお母様方にとっては、ぜひとも毎週、もしくは週に2回ぐらいあれば、本当はいいのかと思っています。

副会長

それは場所が足りないんですか、人が足りないんですか、両方ですか。

委員

0から3歳まで受け入れて200組もいらっしやった時のことを思いますと、物理的スペースは、現在の場所では不可能です。人手も足りません。

現在ですら今60～70組の参加がある1歳児や2～3歳児の日は苦しいです。広い場所を提供していますので、お手伝いをしているボランティアの人数が少ないと目が行き届かなくなったりしますので、今は精一杯のところをやっている状況です。

副会長

これは、多くするにはどうしたらいいですか。

委員

いろいろな場が足りているんだろうか、というところから触れての発言です。前回の委員会で私も触れたんですけども、府中市はいろいろな施策としては、かなりあると思います。それが実際に機能しているか、していないかという問題です。

私は、この6月30日の中間報告に向けて今まで議論を重ねてきて、本日からは分科会も含めながら、テーマ別に絞っていきこうということで会を開かれていると思うんですが、今までの4回の中ではそれぞれが、委員の知らないところから始まって、それぞれの、例えば私たちとか、ぼぼのように保育もやっているところの代表とか、それから全体的に支援をしている「しらとり」の代表とか、いろいろな現場からの委員がそれぞれの現場を中心に、実態を報告しながら私たちも理解を深め、行政のほうから出てくる資料や何かを参考にして意見を言い、議論を重ねて本日まで来ていると思うんです。

どうも今のポップコーンのお話とか、その立場からはいろいろなご報告がされるけれども、私たちが議論をしていく視点として、母親が働いている家庭と母親が働いていない家庭とか、ひとり親、そのひとり親も母子家庭か父子家庭かによってもいろいろとさまざまに条件が違うと思うんですが、そういうことを何か十把ひとからげで、今ある施策を、では足りない施策をどうするか、というように議論をしているような気が今まででは感じていたんです。

働くお母さんの家庭か、専業主婦がいる家庭か、三世代いる家庭とか、いろいろなところによって施策を活用する立場も違ってくると思うんですね。もちろんそこから発して、不満も意見も出てきていると思うので。やはりその辺を整理しながら、1回目の委員会で私は課長に質問したと思うんですけども、府中市として子育て支援をどういうビジョンを持ってかわりたいと思っているかご説明いただきたいと言ったら、1回目のときは、いいやそれはない、これから皆さんと共に作り上げていきたいとおっしゃったと思いますが、議論しながらつくっていてもそれは構いませんが、ビジョンに基づいて何が必要で、何が不要かという整理をしながら議論をしていくべきだと思います。そして必要なときに、さっき言ったような、両親が働く家庭とか、母子家庭、父親家庭、母親家庭とか、いろいろな条件、それぞれにどう必要で、どう必要でないかを考えなければならないのではないのでしょうか。

今まで府中市にあるサークルの中でも、本当に私たちミモザはよく利用者本意という言葉を使っておりますけれども、本当に利用者本意がすごく大事な視点なんです。その立場によって必要、必要ではないかということを経験しながらつくっていかないと、最近の不景気で予算が限られている中で、いろいろなことがはしょられたり、むだに使われたりしている場面もあると思うんです。そういうところをいつも私どもは頭に置きながら、整理をしながら理論を進めていかないと、なかなかうまくいかないと思います。もう今まで4回やって、数少ない回数で中間報告を出すのに、こういう議論のままでいいのかと、ちょっと不安を思いながら参加しております。

やはりビジョンがあって、何が必要か、本当に必要ならば、お金がかかってもそこに手当てしていく決断というのが大事な政策だと思うんです。ビジョンがあって、施策があって、それに伴う予算をつけるべきです。逆に予算が先に来て、例えば私の現場でも保育ではなくて高齢者の場合なんかでも制度が変わって、いろいろと削減されていきます。予算が削減されていく場面などに会いましても、本当に必要ならば、次世代を担う人材を育てていく支援をするならば、きちんと明確なビジョンを立て、そして必要なものはどんな無理をしてもつくっていき、不要なものはどんどん切っていくという視点が大事かと思うんですね。

そのときに、やはり働く私たちの現場の保育、預かっているお母さんやお父さんを見ていても、働き方の問題なんか結構「あれ」と思う場面はあるんですね。私が1回目にご質問で申し上げたのは、働く側の私たち現場の意見を申し上げるのはいいが、ここに席を置くことも必要なのかということです。子育ての支援だけを考えてできる行動計画ではなく、労働のあり方とか、いろいろなことにかかわっているのに、私たちがそんな大層な施策をつくる行動委員になっていいのか、という疑問もありますという意見を申し上げたと思います。その辺の、働き方なんかもあるととても感じているんですね。よくうちでも、随分長時間お子さんを預かったりするんですけども、そういう長時間預かることに加担していいのかと悩む場面もあるんです。でも現実には、そういう働く社会の機構になっているから、そこで必要とされることはどんどん補っていくべきだという意見があって、それも一見正しいようだし、私たちもいつも悩みながらやっていて、現に困っているから、とにかくお預かりして、なるべくお子さんとお母さんたちを助けるというところではやっています。しかし、果たしてその働き方に関する国のあり方がどこかへ行ってしまって、お金がないから予算を削減していくというところのしわ寄せ見たいなものを、私たちが担っていて、本当にいいのかと悩むときがあるんです。そういうことを含めて、きょうこれから短期間で中間報告をつくっていくときに、その視点に大きくきちんと据えておきたいのは、働くお母さんを支援するというだけではなく逆に子どもをどう育てていくかという視点をきちんと押さえておかないといけないと思います。私は年少保育や何かにも、とても疑問を持っているんですね。だいが増えているようですけれども、子育ての質なんかも変わってきているような気がするから、そういう子どもを、どういう人間に育てて、時代を担っていく子どもを育てる家庭をどう

バックアップしていくかというところが、どうも混同されているように感じます。国の政策が降りてきて、では、それをどうしましょうというところで議論しているような気がどうしても、どうしてもあるんですね。私の理解が足りないかもしれないけれども、その辺をいつも疑問に思いながら参加しているということで、ちょっとご意見です。

副会長

ありがとうございました。議長の立場ですけれども、議長としてではなくて、個人として申し上げたいのですけれど、きょうの進め方としては、まず原点はこれからの会議の幹になる部分を、つくりたいと思っています。幹になる部分というのは、例えば保育所、保育園、幼稚園に通っている人たちです。就学前の施設に通っている人たちというのは、府中市に住んでいる人の90何%、ほぼ100パーセントいるんですね。そうすると、そういうところに通っている人たちがどういう意向を持っているかというのが、多分幹になると思います、この部分では、その中にはひとり親家庭、母子、父子の方もあれば虐待の問題もあるでしょう。しかし、それは幹の部分がきちんとしてくれば必ず細かい部分にも対応できると考えています。

きょうのお話に戻りますけれども、市から資料が出ておりますし、市の会議場でやっておりますけれども、あくまでも民間の人間が集まっている会議ですから、国や都や市の意向だから、こういう方向性というような認識は全く、議長としてはありません。

おっしゃったように、あくまでも行動計画策定の基本ベースというのは子ども本意ですし、子ども本意のことなので、それを大前提にしてお話をさせていただきたいというのが、きょうの大前提のスタンスです。

今、場の問題についてお聞きをしておりましたのは、実はどんどん場をふやしなさいとか、人をふやしなさいということをやるのは、実際的には市の事業としては不可能なはずなんです。当然予算の問題もありますし、人間的な問題、場所の問題などがありますけれども、それをカバーできるような民間の人材の育成とか、援助というようなものがないかという意味で、逆説的な意味で場のことを聞いていた部分もあります。

行政が全部用意をして、お膳立てをしてもらったものの中で満足をするというのは、多分不可能に近いと思います。いろいろな方々がいますから。ただ、それを皆さんのお力で何とかうまく援助ができるような、さっき山村さんからボランティアというようなお話がありましたけれども、そういうことができるといいなというような気持ちを持ちながら、この話をしております。

例えば、ポップコーンの話にしても、場や人数を際限なく増やしていくというのは、なかなか難しいことだと思うんですけれども、行政が全部肩代わりして、それを全部やるというのは、多分無理だと思います。ポップコーンが行政という意味ではありませんよ。行政が同じことを肩代わりして全部やるというのは無理だと思いますから。民間の分野ができることを、できるだけ知恵を出しながらという部分を、今日話し合えていけるといいなという気持ちがあります。ですから場が足りているんでしょうかというのは、保育園や幼稚園のところでも機能はしているかどうかはわかりませんが、というのを素っ気なく言いましたのは、いくらつくっても、そこに行ったり、助けてくれる人がいないとあまり機能しないという意識があったので、そんな言い方をしたんです。そんな感じで、またご意見をいただければと思います。そんな感じというのは、私はそんなふうで進めていますけれども、皆さんはいかがでしょう。

委員

今の考えでよろしいでしょうか。ですから、行政ができることと当然私たちもNPO法人で、市民事業として、市民のニーズにこたえてやっている団体とがあって、この中でもそれはいろいろあります。できること、

できないことがある中でそれを承知して、自立支援という視点で提供しているわけですから。

数は、本当にこれでは足りないと思っておりますし、場についても、そういう意味では市民がつくっている広場というのも現にあります。それは文化センターで同時に2つ借りて、保育者を自分たちで求めて、また親は親で交流の時間を持つ。時には親子でどこかへ出かけるとか、本当にそれはミニ保育園的にやっているところです。ですから、私も前回から言っていて、青少対なんかもそういうことで子育てを考える会なんかがあって、自治会もそういうのがあるというようなことで、現に住民がやっていることはたくさんあると思います。それと事業として、やはりきちんと確立してやっている、私たちのようなNPO法人をとりましてやっているところもあります。

また、それで行政の仕組みの中で、そこをどう充実させていくのかということで、しっかりその辺の視点、3本柱、あるいは個人ができることを認識することが大切です。それは、例えばボランティアだったり、またボランティアが気軽に集える場所づくりだったり、そしてそれをどこがするのかというような、以前はひょっとしたら、それが行政と一市民だったかもしれませんが、現在は逆にそういう意味では活動主体が広がってきている、という認識を私は持っているつもりです。その辺での仕切りを皆さん頭の中に描きながら、ではその部分について行政がやること、またはこの部分については法人、この部分は市民のサークル、あるいは自治体、学校、などで対応していくというような、そういう区別で進ませるのがわかりやすいのかもしれないというように思っておりますが。

副会長

今、資料の6ページ、7ページをごらんいただきますと、その辺の施策と事業の現況と課題なんていうようなことも出ておまして、これは市のやっていること、もしくはやろうかなと思っているようなことも書いてあります。

7ページの一番上の に住民相互支援の活性化などがありますが、この辺がうまく機能していけばいいんでしょうし、例えば広報を見て情報を得ることができます。では、自分からはなかなかいけない、という人はどうしたらいいんですかね。行かないあなたが悪いと言うのは簡単なんでしょうけれども、アンケートにはそういう数字も出ているんだと思うんですね。行けない人はというのは、どうでしょうね。

委員

私も赤い線を引きながら考えたんですが、公園で遊んでいるお母さん何人かからですけれども、雨が降ったりなんかすると、子どもを遊ばせる場所がないなどという話を聞きました。それに対処するために、そこまで行くのは大変ですが、あきらめていたら、この会はこれで終わってしまうので、バスが出ているから、空いているバスで何時にそれぞれのお宅の前を回れるとか、本当に小さなことなんですけれども、そういうふうに煮詰めて要望していくことはできるのでしょうか。その内容が、私は一般ですから、本当に足で回って、お母さんたちと間近な距離で意見を聞いています。一番よくわかりやすいのは、この自由回答で見られた意見に、もう本当に1人ひとりの意見が表れているんですよ。これを煮詰めていくと、何か1個出てくるのではないかと一生懸命何回も読みました。サークルに参加しない理由とか、そういうのは、本当にこんなちょっとなのに、本当に1センチ考えを変えれば、参加したらすばらしく楽しいんですが、その1センチを進めるのが広報であったり、やはり情報、それと口コミと、それからその内容が重要だと思いました。例えばその場所へ行って、こんなことをしていたわよとか、昔話を話してくれる人がいたわよとかいう口コミが一番強いような気がしました。やはり内容が大切なのかと感じるんです。いくら、あそこへ行きなさいと言っても、帰ってきて嫌な思い出しかないようだったら、多分二度と行かないでしょうから。でも、あそこ

へ行くと何かちょっと変わっていることをしているというような、たくさんの場所は要らないんですけども、そこでの内容が濃いと多分続いていくのではないのでしょうか。200人集まったら、すごくすばらしいと思います。そういう、この自由課題の中のところを1個ずつ拾っていくと、その内容が何となくわかるような気もするんですけどもね。

副会長

口コミというのは、つまり人対人ですよ。そこまで来ない人はどうしたらいいんですかね。私はあまり人とつき合うのは苦手よとか。つまり、自分からなかなか入りにくい人でも。

委員

何て言っても人間同士ですから、紙とか活字よりも、やはりこういうふうに話す機会が、何かちょっとお節介おばさんかな。だれかがボランティアで前へ出ないと、ここで終わってしまいます。前へ出ていく。

そういうのは、やはり人材育成なんではないですかね。そういう育成した人たちが動きだす。

副会長

人材育成については、いろいろなことがあると思います。組織の周知という意味では、広報だけではなくてホームページなんて今やっていますけれども、口コミなんていうのも当然ありますよね。それ以外に、ポップコーンはホームページには出されていますか。独自のですか。

委員

府中市のホームページの中に項目としてありますが、ごく簡単なものだったと思います。日時、対象年齢、場所の説明もありますが、詳しい内容の説明等は、たしか最後見た記憶では載っていなかったように思います。

もしもっと詳しいものを載せるとなると、各会場ごとにスペース・集まる人数・やっている活動内容など異なりますので、非常に掘り下げたものをホームページ上に載せなければなりません。ですから簡単に「つくりましょう」「はい、できました」というものではないと思いますし、どんどん流動的に変わっていきますので、それをキャッチアップしてどんどん更新していくというのは非常に手間がかかると思います。まだそこまではやっておりませんし、やる予定なのかどうかも知りません。

副会長

どうぞ。

委員

今までのお話と自由意見とポップコーンということで感じたことなんですけれども、文化センターという名前ではなくて児童館という名前で施設があって、その中でポップコーンが行われていて、児童館に行けば子育てに対する情報が一覧できるとか、そういうふうなはっきりしたものであると、情報が無いという声が多少改善されるのではないかと感じているんですが、文化センターに行くとき子育て情報が何か掲示されているか、あるいはポップコーンが今度いつどこでありますかということが聞ける窓口であるかという、私の知っている範囲では現在そうではありませんし、例えば市役所の子育て支援課に行けば、こういう私たちがいただいているような地図があって、地域の子育て支援のものが地図で一覧できるようになっている

かといえば、これもなってはいないのではないかと思います。若いお母さんたちというのは、やはり活字ではなくて、子どもがついている絵があったら、あそこへ行けば情報が何かあるんだなということに、やはり傾いたりすると思うんですね。

それで広報についても、広報はやはり全世代のためにあるので、あそこの何ページかをめくると小さくポップコーンのことが載っているという状況ですので、やはりあれを見逃してしまう方も多いのではないかと思えます。

副会長

なるほど。情報を周知する意味では、表現が適切かどうかはわかりませんが、窓口を一本化するとか、あそこへ行けば必ずわかるという場所をつくる。

委員

つくと情報がわからないとか、情報が入ってこないという声には多少こたえられるかなというか。

副会長

必ず出ていますね。どこに聞いていいのかわからないとか、ちなみに文化センターで聞いてわかるんですか。ポップコーンのことを教えて、と聞きに行ったらわかるんでしょうか。

子育て支援課長

答えづらいんですけど。

文化センターとか、児童館というらえ方なんですけれども、我々も永遠の課題と言ってしまう言い過ぎなんですけど、いわゆる児童館というもののイメージがありますよね。それと府中市の児童館が違うんですね。いわゆる老人福祉館というものと府中市のそれが違う。府中市の場合、それらを全部まとめて1つのコミュニティセンターという枠組みの中で整備していますので。今おっしゃったような、児童館の部分もいざやろうとすると、あの区切られた空間の中で、児童館が対象としている運営をどうやってやるか。

例えば、我々もポップコーンをやろうとしたときに検討しましたが、あの環境で赤ちゃんを預かれるのか、そこで遊ばせておけるのかというところで別の施設なり、別のほうへ行っていますけれども。ただ、お話になった児童館という文化センターへ行って、そこで子育ての情報が入らないという、この現状は今反省しておりますので、今回に限らずこういう形で意見をいただきまして、当然我々も別に庁内の連絡会を組織しておりますので、行政としての答えはこの会議の中で出していきたいと思えます。

副会長

周知の方向が1つできましたね。どこどこへ行けば、子育てのことはお任せみたいな窓口をつくってしまえばいいんですね。資料が全部あってね。

今、情報の提供のお話が出たんですけども、続いて口コミをする、小熊さんではないけれども、お節介おばさんなんて話がありましたね。何て言うんですか、あなた、ここへ行ったらいいのよとか、格好よく言うとコーディネーターなんだろうけれども、もっと大きな意味では、例えばポップコーンもあるし、これもあるし、あれもあるよというようなことをまとめた上で子育て全般にかかわれるようなまとまりをつくれるような、今子育て支援課が一種コーディネーターというか、連絡調整みたいなことはしているんでしょうけれども、そういうコーディネーターみたいなものがないでしょうかね。社協なんかもそうですよね、一種そういう。

委員

府中市では164名の民生委員さんが委嘱されて活動されておりますので、本来はある意味で情報の部分ですとか、かかわりの部分ですとか、そういった部分については民生委員さんの果たす役割がかなり大きいと思うんですね。実際に弓削田さんのほうもポップコーンにかかわられたり、いろいろとかかわれていますので、逆に弓削田さん、その辺の動きがあればお話をいただきたいと思うんですけれども。

あと社協の動きであれば、やはり地域リーダーづくりですよ。その辺が今後すごく必要になってくるのかなと思っておりまして、ほかの地区なんかへ行きますと、よく聞いた方もいらっしゃるかと思いますけれども、ふれあい生き生きサロンというような、要は住民が主体的に集まって、自分たちが地域の中で活動していくというのがあります。ただ、それは児童だけとか、高齢者だけではなくて、要は子どもさんもいれば、大人もいるというようなことで、ある部分では気の合った同士の仲間が集まって、地域で主体的に活動していくという取り組みなんです。今、社協でも自治会をお願いをして、そういった場づくりですとか、あと自治会のないところも当然ありますので、そういったところは私どものボランティアさんが中心になりまして、生き生きサロンのようなものをつくり始めています。そのようなことも、少しずつですけれども、動き出しております。ただ、場の提供の部分におきましては自宅開放ということもありますし、それから町会、自治会の公会堂を開放するということがあります。例えば世田谷区では小中学校の一部を開放しています。そういった行政の、すでにあるものを地域に開放する中で、子育ての場として使っていただくとか、生き生きサロンの場として使っていただくとか、そういう活動が動き始めております。そういう部分がありますと、もっとその辺の動きが活発になるのではないかと考えております。

副会長

今、小中学校の空いている教室等の開放なんていうのは、すぐにできるいい施設だなと思いましたがけれども、ちょっとお聞きしたいんですけれども地域リーダーというのは、どんな人になるんですか。

委員

私どものボランティアさんは、大体50代、60代の方が登録者全体の55%ぐらいを占めていますので、ある面では、今までのご経験を生かしていただく中でかかわりを持つということになります。その中にはたまたま昔保育所に勤めていましたとか、そういった方もおられますけれども、基本的にはまったくのボランティアということになりますね。

ですから先ほどの学校なんかの状況等を見ていますと、子どもたちが帰ってくると、その生き生きサロンに寄るんですね。そうすると7月の七夕なんかですと、一緒に短冊を書いたり、そういうものが身近なところにあって交流につながっていく。新しいものをつくっていくという方向もあろうかと思うんですが、あるものを基本的には、例えば時間の制約を外すとか、ある部分ではさっき言ったような文化センターはこれこれこういうものですよというものの制約を少し減らす。そうすることによって違った使い方や取り組みが生まれます。当然それは私たち自身の責任もついてくるんだと思うんですね。やはり広げてくださいということは、責任も私たちにつくものですが、その辺と合わせながらやっていきますと、予算がこれから厳しいんでしょうけれども、少し違った形での取り組みができるのではないかと考えています。

副会長

ありがとうございます。今の話を繰り返してもしようがありませんけれども、いろいろといいお話が出ました。

その中には地域リーダーなんていう話もありましたけれども、もう一回聞きますけれどもどうやって探すんですか。

委員

私どもでは、ボランティア講座をやります。府中は講座がかなり多い地区です。例えば、今後、こういう地域リーダーを育てたいとか、育成したいということであれば、それをある意味では主体的に打ち出して、募集し育成していくということですね。

ですから、ある意味では現場があることによって、逆に参加しやすいというのがありますね。講座をやって、あとは何でもいいですよということではなくて、こういう活動の場所がありますけれども、ボランティアをやりませんかみたいな形のほうが定着率というのはかなり高まります。その辺は過去やってきて結果が出ています。

田口さんをご出席されていますけれども、例えば、しらとりの活動なんかでも一緒にボランティア講座をさせていただいて、それでしらとりの会場を借りて、そこでボランティア講座を開催させていただき、一緒にその活動体験をして今度はさきほどのような活動をやっていただくような取り組みが大切です。具体的にはそのような形でリーダーづくりをしていくんですね。

副会長

もう少し詳しく年齢の平均とか、男女の構成比とか、府中の在住年数とかはわかりますか。

委員

大体男女比でいきますと70%以上、もうちょっといって79%ぐらいが女性です。あとの残りが男性ですね。平均年齢でいきますと約48歳ぐらいでしょうかね。

副会長

案外若いんですね。

委員

50歳を過ぎていますね。そうですね、60歳ぐらいですね。

副会長

府中には戦前からいらっしゃるとか、戦後入ってこられたとか、そういうものもわかりますか。

委員

データを今持っていませんが、私の感じるところでは従来からずっと府中に住み続けている方よりは、やはり新しく府中に住まれた方のほうがボランティア活動に熱心というような感じはしています。ですから、地域でもボランティアさんが多いのは中央部よりは周辺ですかね。例えば、四谷のほうですとか、新町ですとか、そういう地域の振興住宅地、日鋼町のほうですとか、白糸台のところはたくさん家ができていますけれども、そういったところのほうがボランティアさんは多い、そんなような結果が出ていますね。大体年間、延べで1万7,000名ぐらいが活動しています。

副会長

1万7,000名ぐらい。延べですか。

委員

また、大体8割方が施設活動です。あと2割が在宅の活動です。

副会長

ありがとうございます。実はきょう一番最初にお話ししましたように、場の問題から心構えというんですか、気持ちの問題に入って、その後人材育成とか、周知の方法なんていうことから最終的には地域子育て支援のためにどんな仕掛けがつかれるかというようなお話。この話は北場先生のご意見でもありますので、そのようなお話ができればと思っておりましたら、随分といい例が出てきましたので、少ししらとりのほうのお話もしていただきながら参考にしたいと思います。どうぞお願いいたします。

委員

今、こちらにも載っていますように、うちでは基本的にその子育て支援事業のオープンルームというものをさせていただいております。大体月に2回。ことに限りまして、名前的にはちょっと不思議な名前なんですけど、屋台オープンルームという、公園を使っの。

副会長

屋台ですか。

委員

そうなんです。だから担当者が非常に屋台というものにこだわってまして、「野外ではないの」と私も言うんですが「屋台だ」ということで始まりました。それまでは中央文化センターを使って、年に3回ぐらい出前のオープンルームという形でやってきたのが原型で、やっております。ただ、あくまでも地域の子育てを見ていったときに、やはりお母さん方が集まる場所で最初はやっておりました。今はポップコーンが始まり、いろいろなところでそういう事業がふえてきましたので、うちのほうはそれなりのペースでというのはあるんですが、もう1つはきっとそういうところにかかわっていらっしゃる皆様方ならご存じかと思うんですが、やはり少しケアを必要とするようなお母さん方がいらっしゃるのではないかと。その方たちにもう少し深く入っていくのが、うちの仕事ではないかという思いをしておまして、今ミニマザーズクラブというものをさせていただいております。これはうちの臨床心理士という職の者がおまして、それとあと社会福祉士という職の者がおまして。そちらのほうで「完全な子育てなんかいない」というカナダで流行っているノーバディズ・パーフェクトというものがあるんですが、その研修を受けてきた人間がおまして、そちらでちょっと自分で育児不安を感じているお母さんとか、やはりちょっと不安なのかと思われるお母さん方に声をかけさせていただいて、今させていただいております。それは、大体今7名のお母さんが今回参加されていて、お子さんはお子さんで保育で預かって、お母さん方と今2人の人間がかかわりながら、そのお母さん方のいろいろな気持ちの部分とかを整理させていただいて、少しでも子育てが楽になればということでさせていただいております。

あとはショートステイ、トワイライトステイという実際のサービスをしらとりの中に持っておまして、そちらのほうを利用していただくことで地域内における子育ての一助になればと思っております。ただ、今回の次

世代育成という形でいけば、先ほどおっしゃったように私も1つは労働という部分の働き方という部分と、やはり福祉の施策という部分のどこまでがどうで、私たちには労働のことは言えない部分もあるのかもしれないと思います。私どもが仕事をしております母子生活支援施設という、もう1つ本体があるわけですが、やはりそこはどちらかというと家族の問題の先端を悪い意味で先にとってきている施設でもあるわけです。夫の暴力などで入られる方もいらっしゃるということになるわけですが、その中でやはり今一番感じるのはコミュニケーションができない、コミュニケーションが不足しているということです。これが子育てを何よりも知らない、できない、やりたがらない、と言ったら語弊があるのかもしれないけれども、やはりその大前提がコミュニケーションという言葉なのかと思っているのが1点あるんですね。

それと、やはり参加はしたい、仲間になりたいけれども、仲間になる方法がわからない、仲間になっていくやり方がわからない。だから、そこをだれかにサポートしてほしいというようなところもあるのかと思っています。

もう1点が、これは私自身勝手な思いで言ってしまうので、これは個人的なご意見だと思って聞いていただけたら。先ほどの広報という形の部分なんですけど、1つは先ほどおっしゃったようなやり方もあるかと思うんですが、私はむしろ逆に言えば、母子手帳を配られるときに、府中市の方が、お祝い金というのではないけれども、お祝いのためのヘルパー派遣事業の券か何かを差し上げて、「必ずこれは使えますよ」と言ってお出したら、NPOさんで、こういうのをおやりのところとか、うちとか、いろいろなファミサポだとかあるわけですから、そこが伺うことになるわけです。それはやはり最初のコミュニケーションをつくるきっかけにはなるのではないかな。それによって、そこの中間層が持っている今の府中市のある施策というか、いろいろな先ほどおっしゃっていたどこかに行けばわかるという内容のものも、ある程度わかっている、それを教えて差し上げれば、ここに行けばこういうことがわかるわよとか、きっとこういうのをやっているのよというのわかるのかな。それが、一番最初の入口かなという思いがあるんですね。

最後にもう1点あるとすれば、これはきっと皆さんの大反対を受けるだろうと思っているんですが、私どもが施設をやっていると思うことは、やはり施設でも、例えば納涼祭をやり、文化センターでも納涼祭をやる。保育園でもやり、学校でもやりというようになると、地域って何ってわからなくなって、施設ごとでばらばらでやっている。やはり1つの地域が1つの地域として機能するためには、ああいう大きな行事は小学校なら小学校で、そこに保育園が入り、幼稚園を入れる、施設が入って、そこで一大イベントみたいな、ことしの納涼祭は何々小学校で、ここの地域の小学生はみんな含めて、お母さんもお父さんも、何ていうんですか、地域の施設もみんなその中でやるんだよという格好にします。そうするとよくも悪くもわいわいがやがや集まってきて、その中でいろんなことをやってお父さんとか、お母さんとか、いろいろな方が出てきたり、子どもたちも何か普段は遊ばない相手が何かとてもいい遊び相手になったりすると思います。そんなのが地域でお互いの相互援助機能というか、それをつくっていくための大前提のものになるのかという思いはあるんですけども、何か主旨がずれたような気もするんですけども、私の今の思っている感想です。

副会長

ありがとうございました。どうぞ、どうぞ。

委員

今の話を伺っていて、私もここにメモをしてきたことと同じなのでびっくりしたものですから。

実は、私はただ、初めての子どもが生まれたときに、子どももこの世の中に出て本当にゼロ、お母さんも母

親となってゼロ。その出発するときにさっきおっしゃったようにケアする人がいたら、その人の人生はやはりレールのいいところに乗るのではないかというのが。

副会長

母子手帳に券をというものですね。

委員

それとも、保健婦さんは全部にはとても無理ですから、保健婦さんにかかわっていただいたらさっきおっしゃったように、1カ月に1回行ってお家へ行って、順調に育っているかどうかを伺うことができます。そして帰ったときに夜泣きがすごいとか、ちょっと湿疹が出ている、などを保健婦さんに伝える中間の人がいたら、保健婦さんも現状が把握できます。保健婦さんが行かなくてはいけない状況であれば、どっちみち行くでしょう。だから中間の人がいたら、とてもスムーズに母子親子、母と子は上手に出発ができると思います。保健婦さんによる見守りもあるし、あの人があればいろいろ聞けるしなどと考えるでしょう。だから行ける保健婦さんは一応講義を受けたりしたらいいと思います。私もない頭で、今日はそんなふうなことを発表できたらいいなと思いつつ来たんですけども。

そういうことが、ずっと幼稚園、保育園、小学校につながっていくし、お母さんとの横のつながりもうまくなります、同学年で。だから母親の立場から言うと、そういうものがあつたら最高にいいなと思います。本当にわからぬうちにそういうふうにスッと入れれば。

副会長

ありがとうございます。いかがですか。

委員

私は2ページの自由回答のところを見ていて、脇に自分の意見を書いたのは、やはりお母さん方の中で、何か上からもらうことを待って、こういうことがあるから行くと受身に考える人がいるということです。しかし中にはこういうことはしてほしい、ああいうことはしないでほしいという意見を言える人もいますよね。そうしたら、その意見がその場でうまく救い出されるようなことが起きれば利用者参加の検討会というんでしょうか、みんなの集まる場でやっている活動の検討会を利用している人がやっていくというような、受益者が大事にされるムードができてきます。そういうムードというのは、やはりこれは一般的に日本の教育にもかかわっているんでしょうけれども、こういう決まったものがあるから、「これをやろう」「はい」とやっているうちに「自分はこういうのは嫌だ」と逃げるなどのケースが出てきます。では、自分はこうしてほしいんだというので、どんどんそれを前へ出していきようなことになったらいいな、またそれがあれば解決されるような自由回答というのは、結構多いなというのを感じました。

それがうまく言える場がないのかということですよ。

副会長

もう残りの時間が少なくなってきまして、虐待や育児不安のほうもお話ししなければいけないということなんですけれども、私がさっさと印象をまとめますので、それではだめよというようならご意見をください。

まず、1つ目としては場ですね。場が機能するような、今おっしゃってました人材を育成する必要があるのではないかと。この場については、これから質問をしますけれども、あえて新しくしないで、あるものを

使い、制約をできるだけ外す。例えば、飲食したらだめよとか、ここに登ってはだめよとか、時間はここまでよ、というのではなくて、できるだけ使いやすいうように制約を外したり。ご希望があれば小中学校とか、市の施設だったら制約を外して貸すことが可能かどうか聞きましょう。

どうでしょう。

子育て支援課長

即答は。

副会長

即答はできないそうです。

子育て支援課長

即答は、それぞれ検討する必要があります。

副会長

それから、今人材育成というなお話をいたしましたけれども、皆さんのお話を伺っていると、リーダーになるような方々を育成するという意味もありますし、それぞれの世代やそれぞれの立場の方々の知恵を生かすという側面もあると思うんです。発掘する部分と育成する部分と両方あるんですけれども、どこが発掘したり、育成したりすればいいのかというのが、まだ皆さんの話では、今のところ出てこないかなという気がしています。

それから3つ目は、こういう組織があるんだよとか、こういうことをやっていますよということの周知徹底の方法が、幾つかユニークな案が出てきました。

例えば、子育て支援窓口というんですか、ここへ行けば子育てが何でもわかるというような、そんなような、子育て窓口と言ったんですか。

委員

名前はつけていないんですけども。

副会長

そこへ行けば何でもわかるというような窓口にするとか、母子手帳にそういう利用券みたいなものをつけたらどうだというようなご意見も出ました。いずれにしてもいろいろな方法で周知するやり方があるのではないか、もっと努力してもいいというようなことだと思います。

それからおっしゃいましたように、みんなが集いやすいような仕掛け、合同イベントがいいかどうかは別問題にしまして、そういう仕掛けをできるだけお金をかけないで、育成されたボランティアを集った上で運営できるような仕掛けができると随分いいのかなというような感想を私は持ちました。

私なりにまとめましたけれども、皆様のご意見はいかがでしょうか。

では、ご意見があるようでしたら、また次回の会議でも結構ですので、一応この地域支援についてという事は、閉じるわけではありませんけれども、とりあえず終わらせていただきまして、次の育児不安・虐待、ひとり親というようなところに行きます。

それで、お約束した時間まであと30分少々です。資料の説明といたしましうか、多少説明をいただいた

ほうが考えやすい部分もあると思いますので、資料にのっって3分から5分で説明をいただいて、その後、皆さんのご意見をいただいて、5時ちょっぴりに終わります。

北場先生は、私の司会で非常に苦しい思いをなさっていると思いますので、最後に10分間北場先生にお話を。では5分にしますか。喉が痛いので無理だそうですから、5時ちょっぴりには終われるようにということで。事務局のほうから2番、3番をあわせてご説明をいただければと思います。

子育て支援課長

資料9ページのテーマ別の検討2、育児不安・虐待のところになります。今のお時間ですと前段の育児のところをご説明できませんが、こういう状況の中で今、市の現状ということになります。12ページの施策・事業の現況と課題ということになります。

まず情報提供体制という切り口の中では、子育て不安や悩みを少しでも解消するために、情報や保育サービスの内容を多様な媒体を活用しながら提供するよう努める必要がある。それから、具体的な取り組み、情報誌として「子育てのたまたま箱」というものがございまして、これを配布して、ホームページを開設するなどの取り組みを行ってきた。

この「子育てのたまたま箱」につきましては、去年から数をふやしまして母子健康手帳をお渡しするときに一緒にお渡しする方法をとっております。これをやっていくことによって、ある年数が経てば子育て世代全部に行き渡るのであろうと考えています。

その下の、今後は情報提供の機会のさらなる拡充を図るとともに、市民参加のもとに情報内容を検討するなどして情報内容について真に必要とされる内容となっているかどうかを確認しながら充実も図っていく。

具体的な四角の中の事業は、現在の事業です。パンフレットの作成、多様な媒体を活用した情報提供ということで、新しい方向性では、子ども家庭支援センター内に情報コーナーを設置並び各種事業を通じた情報提供を実施。この子ども家庭支援センターにつきましては、次の段落でご説明させていただきます。

相談体制というところで、現状が子ども家庭支援センター「しらとり」、田口所長もお見えですが、ここが平成8年から市内では子育て問題の中核となって活動してまいっております。

それから、先ほど出ました保健婦活動という部分では、健康推進課の保健師さんが中心になってやってきております。

平成17年、来年3月に府中の駅前に新たな中核施設、これはある意味では先ほど出ていましたポップコーン事業を毎日展開するという意味での施設です。それから、総合相談を中心的にやっていくという意味での中核施設になりますが、位置づけとしましては現状、「しらとり」が1カ所ありますけれども、もう1つの新たな子ども家庭支援センターとして開設をいたします。

その四角の中ですが、中核施設(新たな子ども家庭支援センター)の概要ですが、子育てに関する総合相談及び情報提供のネットワークの中心となるとともに、親子が気軽に参加できる子育てひろば、子育て講座の開催、ボランティア・子育てサークルの育成支援、児童虐待防止の対応などを総合的に推進する中核施設(子ども家庭支援センター)を設置するものです。

その下の子ども家庭総合相談。これは総合相談部分をもう一度言いなおしていますが、今後の方向性のところで新たな子ども家庭支援センターを核として、子ども家庭支援センター、今までの「しらとり」と連携を密にし、同じ方向性を持った子育て支援事業の展開を図っていきます。ということで、新たな中核的な施設は市の中心部でできることによって、情報提供とか、ひろばの回数不足とか、時間の問題とか、そ

ういふ部分はある程度施設開設で対応できると思っております。

それから(3)児童虐待対策。市の現状というものをここでお示ししておりませんが、かなり我々で受けている相談件数もふえておりまして、深刻な状況になっております。これに対応するため、市では昨年、児童虐待防止連絡会議を設置しまして、その前段として専門相談員を養成するという方針で児童相談所に派遣し、研修を受けながら相談業務を携わっている。現在2名の職員がこの虐待問題の専門相談員として活動しています。

それから、市民向け虐待マニュアルパンフレットの作成ということで、これもこの連絡会議の活動の一環としてこの3月に作成しまして、文化センター等に置いておりますけれども、自治会を通しまして、この5月下旬ぐらいに全市域回覧という形で配布をしていく予定になっております。

四角の中ですが、児童虐待専門チームの設置、虐待母子ネットワークの構築、マニュアル、これは今説明したとおりです。

次に14ページ。ひとり親関係ですが、これにつきましては16ページに行きまして、まず相談体制として母子自立支援員という職員が現状は東京都の職員の方で、市のほうで定員を確保し1名の方がいらっしゃいまして、この方が中心になってひとり親関係の相談に対応していきます。

それから具体的な事業としますと、ここにありますひとり親家庭ホームヘルプサービス事業、交流支援事業しか、メニューとしては、現状ございません。

この会議の一番初めに市の説明のところ、母子家庭対策の関係を若干ご説明しましたけれども、現在このひとり親家庭、母子家庭の母親の自立・就業支援策等を、ここに重点的に力を入れていくということで促進計画をつくっていく。この部分で現段階何も書いておりませんが、行政のほうで少し整理をさせていただいて、次回以降具体的なものを少しお示しをして、ご議論をいただければと思っております。

次のページは負担軽減ということで、現状の国の手当、医療助成関係等をお示しているところでございます。

以上です。

副会長

ありがとうございました。ちなみに、府中市内の虐待の件数を教えていただければと思います。

子育て支援課長

平成15年度、昨年度ですが私どもの課で相談として受けたのが107人。83世帯です。これは虐待を含めた養育不安というか、それを含めた形です。このうち最初の相談の主訴といいますか、それで分類しますと虐待は107人のうち、子どもの数で数えていますが74人、69.2%。養育困難が28人、26.2%、その他5人、4.7%で、7割ぐらいが虐待の相談になっております。

副会長

ありがとうございました。虐待の問題については、そのような数字が上がっているということでもあります。虐待が起きてしまった場合は、児童相談所がありまして、専門に受け付けをしてありますし、専門の対処をしているということでもありますので、育児不安・虐待の予防といいたほうがいいでしょうか、そういうことについてどういった手助けをしていったらいいだろうかというようなことが施策としては12ページに出ているということでございます。12、13ページですか。

児童相談所に持ち込まれる虐待のケースというのは本当に、それこそたばこの跡がついているとか、殴られた跡がもう日常的に取れないとか、まったく育児をさぼっているとか、もう本当に悲惨な例が多いようです。ですから、「あの人、たたいているから虐待ではないの」など、予備軍としての可能性がある方々というのは10%近くいるようです。不安に思ったり、そういう予備軍もあるということですから、施策として、また同じ市民としていろいろと手助けができればというようなことで、皆さんのご意見を伺いたいと思います。

12、13が施策等々であります。田口さんが一番詳しいかと思いますが。

委員

詳しいと言われてしまうと困るんですけども、母子生活支援施設というのはそういうところにある施設と想像いただければ結構です。母子生活支援施設、今入所理由の6割が夫の暴力等を受けた方が入所されています。また、そのうちの6割が虐待をしているのではないかと疑われる方が生活をしている、というのが現実のおおよその数字です。そこから言っても、やはり一番大事だと思っているのが、コミュニケーションがとれないというところなんですね。先ほども、そこから発想している部分もあるんですが、やはり昔というと語弊があるかもしれませんが、昭和の終わりごろに、私がすでにこの仕事をしていたときに、結婚する相手が両親の反対にあって、そのまま結婚をして、うまくいなくて離婚をしたというケースがあります。このように、両親とか、いろいろなところに手助けを求められないからという理由で入所してくるケースが多かったんですね。今は実の親と一緒に住んでいるから、だめだから母子生活支援施設で面倒を見てほしいという、ここが一番の変化なんですね。

ですから、昔はお正月なんかでも20世帯の中の15~16世帯はそのまま施設の中でお正月を過ごすという形だったのが、今は4世帯、5世帯ぐらいを残して、皆さん実家に帰ってしまう。だけど実家に長くいるとけんかしてしまうから戻ってくるというように、今と昔ではコミュニケーションの部分が違います。そういうところからやはりコミュニケーションを上手にとれない家族が生まれ、またそれが時代の中というか、親から子どもの育て方とか、そういうものについても学べなかった方たちが多いというのが1点感じるかなんてですね。

もう1つは、今のお母さん方は優秀な方が多く、仕事をするための高い能力がある方が多いのですが、仕事につく能力と家庭で子どもを養育する能力とはまったく別物かもしれないと思われる方が多いようです。その辺が今虐待ということに関連して、子どもを育てるというよりも子どもと何かをしているよりも仕事に行っていたほうが、ご本人も気が楽という風に思われる方もいらっしゃるようになります。

副会長

さっきの話とまた関連しますけれども、いかがですか。

委員

難しいですね。私たちがミモザでお会いするお母さんたちも、やはり子育てを見て育っていないから、いろいろなことがわからないといいます。実際に暴力による虐待とかまでいっている人は出会ったことはないですけども、自分が子どもを無視するとかということでの、まだそのところに母親の認識はあるんですよ、それが虐待だというふうに思って。だからミモザは保育を含めて、保育で依頼があっても家事やなんかも全部するんですけども、ただ、ここに一緒にいてほしいというお母さんが結構います。家事やなんかをやってくれなくていいし、特にどこかへ子どもを連れて行って保育をしてほしいとかではなくて、自分を制御するためにそばにいてほしい。そういうお母さんは結構います。

さっきおっしゃったように、いろいろなポップコーンなどがあつたりするけれども、そこに出ていけない若いお母さんたちが家の中で母子と向かい合って、すごく悩んでいるというケースが結構あるので、保育と言いながら、お母さんのケアをしているというケースが結構あるんですね。その辺でどうしても大変な重症というか、そういうことにつながるようだったら、私たちコーディネーターが、逆に保健婦さんたちにご相談して、なるべく力になれるように対処しなければなりません。だから保育ではなくて、お母さんのケアなんです。そのためには私たちも研修とか、いろいろなところへ出向いて実状を教えていただきながら接していくみたいな、そういう保育というのが求められているのだと思います。ミモザは保育3割ですけども、その中にはそういう問題も抱えながらやっている。

そういうことで、結局さっきおっしゃったように、今の若いお母さんたちは30代ぐらいのお母さんで、子供とのコミュニケーションは多分受験戦争に入りかけのお子さんが多いため、勉強を優先しなさいとか、家のことは手伝わなくていいとかのだけになってしまいがちです。それから三世代の昔と違って、家の中でおじいちゃんとお母さんと子ども、そして例えば子育てを見ているという、そういう経験は恐らくないわけで、とにかく勉強勉強できて、人とつながる術もなかなか学べていない。だからよく笑いごとのように、公園デビューなんて言葉があつたように、人とのつながり方が下手なんですね。そういう中で悩んでいる。

だから、さっきの意見の中で言ったように、親と同居している三世代のうちの悩みと、それから核家族の悩みと、同居していても、両親が働いている人と働いていない人と随分悩みが違うようなので、その辺を私たちは見分けながら、それに見合うスタッフを出したりします。そうすると今、やはりコミュニケーションが下手と言ったけれども、あまりいろいろなことを言われて育っていないから、手助けに行く人間の選択が逆にお母さん方の方でしてきたりするんです。

例えば、熱のあるお母さんに対して軽い気持ちで「これくらいの熱、何でもないわよ」と言ったら、けちをつけたととられ、もうこのスタッフは嫌とか、私たちの世代には考えられないようないろいろな現象があるんです。だから私たちもよくスタッフたちに言いますが、子育てはこうあるべきという概念があつて決まっているのではなくて、今の若いお母さんが何を望み、何に悩んでいるかというところを共感しながらかかわるということにすごく神経を使っています。結局そういうことで、施策をつくっていく行政にしても、政治家にしても、それから私たちのかかわる人間も年齢が高ければ、概念がかなり違っているから、そのところをよく気をつけて、どうバックアップするかというのも大切な点です。前回の会議でも意見が出たかと思うけれども、限りなく出る要求に対してどう平等性を持ってやっていくかという、そういうところもすごく大事なんだと思うんですね。だけど、悩みがどこにあつて、では本当にここに必要ならばどんなに大変でも何かをつくっていかなければみたいな、そういうことがとても大事なと思うんですね。

私たち、民間やなんかバックアップしていくのは、それなりにできます。あくまでも対症療法的になつてしまうけれども、対症療法とある程度必要な政策というのを明確にしていかなければなりません。何となくの施策ではなくて、民間に任せながらみたいところに行ってしまうと間違ってしまう部分もあるし、施策の中でもここは大事というところを、何が大事かということをいつも整理していかないと、この行動計画の誤った施策をつくってしまうことにもつながっちゃうなと思うときがありますので、その辺を気をつけたいと思いますね。

副会長

すみません、ちょっと質問させてください。ミモザで接しますね、そういうコミュニケーションができない人たちと、成長してコミュニケーションができるようになっていくんですか。

委員

もちろんそうです。その中で一番大事なのは、やはり信頼関係ですよ。だから、今までの意見の中にはいっぱい出てくるんですけども、なかなか行きにくい、行ってもこのアンケートの声の中にも、何となく冷たく感じて戻ってきたとか、そういうのがあるんですけども、やはり信頼関係ができるまでにかなり日時がかかるんです。信頼関係の中で1つの例で言えば、赤ちゃんが生まれたときからお世話をされていて、ほとんどは赤ちゃんを育てたことがないから、育てないんです。全部私たちが面倒を見て、極端に言えば1年たったときに、あのときミモザにかかわってもらえたので子育ての大変さを乗り切れましたというお手紙が来たり、あるいは入学式になったからと、もう何年もたっているのに、入学式を迎えることができました、というようなごあいさつをいただいたり、そういう中で本当に長期だけど変わっていつているんですね。それは一重に信頼関係の中で自分をさらけ出してくる。そここのところはすごく大事だから、というのは感じますね。

副会長

ありがとうございました。杉村さんがおっしゃるような施策の部分では、こういう仕掛けは必要ですよ。そういう救ってあげられるような仕掛けも必要ですし、人材の育成という部分も必要でしょうし、ありがとうございました。

委員

予備軍へのケアと、現になってしまっている人のケアは別ですよ。そういうところを仕分けしながらきちんとつくっていくということが大切です。

副会長

この話はあくまでも予備軍といいますか、予防というような観点でありますけれども、何かあります。

委員

私は、具体的には自分の親戚とか、そういうのを見ながらですが、確かにおっしゃったように信頼関係というのは大事ですし、時間がかかります。でも、もう少し、やはり経験者が、専門的な子育てをしたことのある人の出番というのがあるのかというのは感じております。

副会長

ありそうですね。

委員

これは外れてしまうかもしれないんですが、うちの施設は老人ホームの隣にあります。実は老人ホームの職員と話しているときに、現在ではお子さんを生む年齢が上がってきているという話題になりました。30代前半後半、中ごろで出産されると、自分の親がもう70歳に近づいています。そうすると老人ホームでも、もうそのケアを必要とする年齢になり、ご両親が35歳前後の働き盛りの時期なので働かざるを得ず、生まれたばかりのお子さんとか、保育園にいるお子さんがいたら、ここの家族は一体介護なのか、育児なのか、仕事なのかという問題が今あるのではないかと思います。アンケートの中には、やはり両方を抱え込んだらどちらかを見てもらいたいとか、何かがあったときにどちらかを見てほしいとか、そのようなものが出てき

ているようです。これから、どんどんそういうふうな晩婚化というか、結婚する年齢がおそくなって、出産がおそくなれば、当然それがまた1つの課題として見えてきて、介護も育児も両方背負っていく精神的負担はすごいんだろうなと思います。

今まで自分の両親は子どもを見てくれるものだと思っていたのが、今度は自分がそれを介護をするという立場の親になっていくという形になると、随分また負担は違うのだろうなという印象を受けます。

副会長

変な言い方ですけども、三世代を面倒見るような、おじいちゃん、おばあちゃんと悩みを持っているご本人と、子どもたちというような三世代の面倒を見るような施設なんていうものも可能性があるわけですね。出てきたわけですね。

委員

逆に言えば在宅のサービスの中で、そのケースに対して介護の担当者が行き、育児の担当者が行き、お母さんのための家事援助サービスが行くという、何かそういうふうな形が近いうちに出てきてしまうのかと思います。

副会長

今後の方向性としては、そういうことも十分考えられるし、今現状として起きているということです。

委員

おきつつある例が少しずつ見えますので、やはりあるのかなと思います。

委員

うちも実際にそういうお仕事を受けていますけれども、ご家族は世田谷にいて、子育てというので手がかり、さらに親は府中のほうの病院に入院しているから、どうしても行かないから見てほしいといっています。一応完全看護だから、本来は家族はいらないけれども、現実には病院のいろいろな人員配置の問題もあって、どうしても忙しいときのケアとかは入りますね。やはり、世代的にそういう問題も起きてきているということは事実かもしれません。現在、2～3件、そういうものを抱えています。

副会長

突然ひとり親のほうに行くわけではないんですけども、またひとり親の方が虐待をするというイコールの話でもありませんけれども、悩みを抱えているという意味では異質な部分もあれば、同質な部分もありますし、お話が似たような部分もあるかと思いますが、ひとり親のほうのお話も、ご意見をいただきたいと思います。

やはり不安もあるし、経済的な不安、不満も抱えているという現状が多いようです。ひとり親というのは離婚されたり、結婚していなかったりという方々だと思います。実際に現実問題として私の幼稚園でも、もう4月から6月までの間に3件離婚がありました。以前は本当にびっくりしましたけれども、今はまた離婚ですかというような感じになりました。本当に現状としては多いんだなというのを実感しております。そんな結果として、こういう部分も出てくるということなんですけれども、ご意見がありましたらお願いいたします。

虐待のほうもご意見ありましたら結構です。

今日はあまりご発言なさいませんが、民生委員としてもいろいろとご苦労があるかと思われませんが。

委員

市民の方からたくさん声を聞いていますので、児童館のことなども、府中市の場合いつも課題になっているとのことで、今日は苦しくて発言できませんでした。

母子家庭では子育てをしながら、長時間働かなくてはならないので、とてもたいへんと思います。父子家庭も親の帰宅が遅く生活面で困っています。民生・児童委員は、その地区にずーと住んでいますので、長い間見守りを続けることができます。訪問家庭で「家は大丈夫です」といわれても、道路や学校でお子さんを見かけると、「おばさん、いつもあなたのことを応援しているからね」と声かけをすると、お子さんにはっこり笑って話をしてくれます。その家のそばを通るように心がけたり、いつもお子さんのことを思っています。

だいたい民生委員のところにいらっしゃるときは、どこに相談に行ってもどうにもならないような事例が多いです。精神的にも不安定になってしまう場合が多いように思います。私たち民生委員はその方の気持ちにそって一緒に悩みながら、ひたすら話を聞きサービスを紹介したりしています。

民生委員協議会では、「しらとり」のオープンルームに月2回お手伝いしていますので、参加された方から相談を受けることもありますし、民生委員を知ってもらって、少しでもお役に立てればと思っています。

今日も公園を通ってきましたが、確かにお母さん方のおっしゃるように就学前のお子さんが遊ぶような公園ではないなと思ってしまいますし、文化センターへ行けば、やはりそういうお子さんが集える場ではないと思いますし、アンケートもそのようなご要望がたくさん出ていますので、空き教室とか、学童の午前中を利用するとかして、雨の日に行きやすいような場を考えていただけたらと思います。

親が夜遅くまで働いていて、子どもさんが家のことをしているようだという通報がありまして、私が夜9時ごろ訪問しましたが、本当にそうでした。とても健気に子ども3人で親の帰りを待っていました。知らない人は養育放棄だとか、いろいろとおっしゃいますけれども、民生委員は親の気持ちやお子さんに沿ってやっています。その3人のお子さんもお家のご用をしていて、私にはとても健気を感じました。「おばさん上がってよ」と言われたんですが、初めてなので、玄関にしゃがんで子どもたち3人と話しました。そのうち、真ん中のお子さんが私に紅茶を入れてきてくれたんですね。私はそれにとても感動し、うれしく思いました。その後、そのお子さんと道で会って、いつも「おばさん、あの紅茶はすごくおいしかったわよ。おばさんはいつもあなたのことを思っているからね」というような声かけをしています。

行政にはお願いしたいことがたくさんありますが、経済的に限りがあることであり、民生委員としては非常に苦しい心境です。

副会長

ありがとうございました。お約束しました時間がまいりました。この話は、またいずれ必ずこの会議の中で出てくることだと思います。それで、弓削田さんのお話を伺うにつけ、さっきから出ています税金を使ってどんどんどんどん拡大をして、いろいろなところをつくっていくというのは、もう無理な時代が来ているけれども、今あるもの、例えば民生委員さんとか、児童委員さんとか、もうポップコーンもそうですし、ミモザもそうですけれども、そういう方々のお知恵を拝借しながら、うまく利用して、制約を外して、知恵を出して、何とかもつとよくなるかなというような感想をもっています。

ということで、一応お約束の時間の5時になりましたので、進行を降りまして事務局にお渡しします。どう

もありがとうございました。

子育て支援課長

どうもありがとうございました。2、3確認をさせていただきます。まず次回の日程ですが、6月15日、火曜日、午後2時から市役所の北の3階の第5会議室で行います。

きょう、お手元にお渡しました日程表を見ますと、次回のテーマは保育サービス、母子保健医療、障害児、それからニーズ推計結果と目標事業量設定ということで、かなり量がございます。それからその次のほうなんですけど、きょうは3時から始まって、何とか5時に終わらせていただきたいと会長のほうにお願いしたんですが、どうしても今まで時間が延びてしまっていて、その点についてご意見もございました。それで始まって、途中の中でこういうお願いも恐縮なんですけれども、2時間という前提で進めてまいりましたけれども、この議事のスケジュールの都合上、3時間という目安を置いていただいて、早く終われば、そこで終わらせていただくというような形の変更は、皆様のご協力でできるかどうか、ちょっと平田副会長申しわけないんですけれども、ここだけちょっと、皆様のご意向を。

副会長

これを聞いてくれと言われていましたが、忘れてしまいました。次回は2時に始まって、休憩も多少はさみながら5時ぐらいまででいかがでしょうかということなんです。早く終われば、早く帰りましょうということですので、いかがでしょうか皆さん、何とか根を詰めてやっていきたいと。よろしいですか。それでは次回は5時終了ということになりますので、どうぞよろしく願いいたします。

子育て支援課長

それから、いつもとおりですが第4回の議事録、事前に皆様にご確認をいただいておりますけれども、この時点でなければ公開の手続きをさせていただきます。

以上です。

副会長

それでは、これで終了いたします。どうもありがとうございました。

以上